

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

事務局 (連絡先) 〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会
***** 天利武人 (教会牧師) 電話 04-7164-9159
(会報編集、ホームページの連絡先) 〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継
***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 19 号
☆ 2020 年 (令和 2 年)
2 月 24 日 発行

★ 2019 年の茶の花忌報告

前日雨で天気不安でしたが、10月26日は晴れ上がり心配が吹き飛びました。例年のように近所の方々の協力で会場の準備が整えられ、青木幸雄さんの司会進行によって茶の花忌は始まりました。

12時30分から墓前礼拝が行われ、今年は日本基督教団鶴川北教会の牧師だった牧野信次牧師 (すでに引退されているが、かつては佐藤ひろ子様が通っていた教会の牧師) が担当された。感話のキーワードは「仰瞻 (ぎょうせん)」すなわち「仰ぎ見る」であり、〈ノオト A〉からの重吉の詩「信ずる者が / 自分の信を信ぜぬとき / 私はもはや生を信じえない」、「死 / それより怖ろしいものがある / 死に切れぬ不信だ」、「神とひとつに生き / そしてどこに怒りがあるか」、「人生いつ 楽しいか / 気持ちがひとつになり切った時だ」などを引用され、重吉は、派手な人気はないが、時の経過とともに根強く人の心に影響をあたえる詩人であり、残るものは人間の本当の輝きである、と話されました。



墓前から生家の庭に移動しての八木重吉を偲ぶ会は、予定では、まず加藤正彦様の挨拶がある予定であったが高齢で体調悪く欠席となったため、「愛好会だより」で話す予定の私が、加藤様が、今回の茶の花忌に向けて、茶の花忌の歴史をまとめて皆さんに還元したいと言っておられたことを踏まえて、茶の花忌の歴史の概要を短く語らせていただきました。

命日の集まりとして今年は 92 周年になるが、没後 25 年の法要 (昭和 27 年) が営まれたころから、登美子夫人と再婚された吉野秀雄氏の尽力により、翌年から発展した集まりがもたれるようになり、没後 29 年に中野文化会館で、没後 31 年には生家で、「素朴な琴」の序幕を兼ねての墓前祭が開かれ盛り上がった。続いて『八木重吉—詩と生涯と信仰』(関茂著、没後 38 年)『詩人八木重吉』(田中清光著、没後 42 年)による伝記が発行される盛り上がりの中で、堺中学校での記念講演 (没後 46 年)、相原小学校での 50 年祭 (没後 50 年) が開かれた。そして八木重吉全集 (田中清光・吉野登美子著、没後 55 年) が編集されると、公の勤務を終えた八木藤雄様が記念館建設を目指し、土蔵を回収した記念館を没後 57 年後に完成させ、その年から、命日の催しを正式に茶の花忌と呼ぶようになっていくようになりました。しかし没後 86 年からは、体調の悪い藤雄様に代わって佐藤様が担当するようになりました。そして没後 90 年には藤雄様が死去されました。没後 92 年から今後 100 年にかけてどうまとめ、どのような 100 周年に向かっていくかは未知なところもあるが、皆様のご協力でその日を迎えることが、八木家とファンの願っているところです。

続いて今年も相模大野の詩人八木幹夫さんが、今年は「八木重吉の詩に表れた津久井方言」という題で話された。14 歳から故郷を離れた生活をし、結婚を反対されて家を勘当された重吉にとって、故郷の人々が話す方言は詩に出てくる例は少ないが、農民のせがれであることに誇りを持ち故郷を愛する詩を多く書いていることから、よく調べてみると方言に関する詩があるのです。幹夫さん自身の体験から思えば、東京に出て標準語の世界に入っていくにつれて出身地の津久井方言を汚い言葉として避ける気持ちがあったが、時を経て思うと、東京の言葉も、もともと東京という地域の方言であり、その土地で生きて来た人々の言葉に引け目を感じることはない、むしろその地域を愛してきた者の愛情あふれたことばではないかと思えて来たとのこと。

心よ

こころよ / ではいっておいで / しかし / また もどっておいでね / やっぱり / ここが いいのだに /
こころよ / では行っておいで (『秋の瞳』)

ここに「いいのだに」という方言があります。「いいのだ」という断定を避ける柔らかな味があります。

陽二よ

なんという いたずらっ児だ／陽二 おまえは 豚のようなやつだ／ときどき うっちゃりたくなる／
でも陽二よ／お父さんはおまえのためにいつでも命をなげだすよ (詩稿「母の瞳」)

この詩の「うっちゃる」も、やはり方言であると指摘されていました。

次に、詩も作るが基本的には歌人の江田浩司さんが、最近出した『重吉』という歌集について話されました。八木重吉展を見て、八木重吉の詩に触れてこころに感ずるものがあり、どうしても、言葉にこの思いを表現したいと出したのがこの歌集だそうで、気持ちをまず詩として表現し、それから歌を載せています。毎月10首ずつ作ったものがこの本に載っています。

次に、昨年引き続き、地元の朗読グループ、NPO 法人「知恵の環」の会員2名により、重吉詩の朗読がされました。

その後、町田市民文学館「ことばらんど」の、館長中嶋さんと学芸員の神林さんの紹介があり、神林由貴子さんが、今年も田中清光氏からのメッセージ読み上げました。「八木重吉は二度とこの世にあらわれない、人の心に働きかけ浄化する力を持つ詩人です。このような集まりが長く続くことを念じています。」とすばらしいメッセージが読み上げられました。

続いて、日本画家の青山京子さんが話されました。近くに土地を借りて彫刻村をつくっているとのこと。重吉が愛したこの地元の豊かな自然の中で芸術活動をする喜びを語っていました。

次に八木藤雄さんの母親の実家に当たる阿部家の方が紹介されました。重吉の小学校時代の親しい友人に阿部君がいますが、どうやらその家は、実家の阿部さんの近所らしいようです。

その後、いつもおいしい和菓子を提供して下さっている杉浦さんの手紙が読み上げられ、今年は参加できないけれど、成功を祈っているとの内容でした。

最後に「八木重吉の詩を愛好する会」の活動だよりとして、小林が話をさせていただきました。今年も地元のスタッフを含めて約100名ぐらいの参加があり、時間をかけて準備してきた記念館の佐藤様も、「よかった」と胸をなでおろされていました。



★ 新発見—1915（大正4）年の重吉の英文日記について

八木重吉の詩を愛好する会 小林正継

茶の花忌の中で、重要な発見として話したかった事がありました。重吉の鎌倉師範学校時代、大正4年の、1年間の英文日記についてです。

2018年の暮れ、佐藤様が業者に頼んで、庭の一角にある小屋の整理をしていた時の事でした。屋根裏部屋のようなところから、古い本やノートのようなものの山が出てきて、その中に英文で書かれた日記帳がありました。翻訳者を探す中で私に連絡があり、私は、1915年という数字を聞いて、これは貴重なものであると思い、是非翻訳させてくださいと答えたことから、佐藤様と二人三脚での翻訳作業が元旦から始まりました。筆記体から活字体への読み取り、活字体からの翻訳作業は、筆記体の読み取りにくさや、英語の勉強のために始めたばかりの英文であることから来る誤った表現を正しく解釈すること、また100年余り前の内容であることから来る、地名や言葉の解釈など、思った以上に大変で、見直すたびに修正箇所が出てきて、時間がかかっています。

この場では、この英文日記が貴重な資料であることだけをお伝えします。

- 1) この日記は1915年つまり大正4年、八木重吉が神奈川県師範学校、通称鎌倉師範学校の本科2年生から3年にかけての1年間の日記です。昭和36年の生家の火事で重吉の子供時代から学生時代のものはすべて失われました。しかし何らかの事情で、母屋から小屋に移されていたものがあつたのです。英文による直筆の1年間の英文日記です。だから貴重なのです。
- 2) 鎌倉師範学校は予科1年、本科4年で、重吉が本格的に文学や信仰に目覚めていくのは4年生（大正5年から6年）からだと思われます。ですから大正4年のこの1年は、その準備の段階のような日常生活であり、英文の書き始めということもあり、内面的な思いを十分には表現はできていません。たんと日々の記録を綴っているように見えます。詩人重吉を期待する人にはまだ未成熟さを感じるかもしれません。でもそれは逆に当時の師範学校の生活を、飾らず素直に伝えているということになります。軍隊式教育といわれます。肉体的にハードな日々です。いわば詩人重吉のイメージではなく、学生としての重吉をみることができます。師範学校の生活の実態が見えてきます。その意味でも貴重な資料です。

3) 予想とは違った重吉の日常を見られる一方で、将来の詩人につながる萌芽が見られます。「哀しみ」を感じています。また夏休みに東京の英語学校に通う際に加藤武雄の家に下宿したこと、タゴールの詩集購入の事実、教会へ行ったという事実、英語の勉強に熱心に取り組む姿、東京で多くの本を買い、英語や文学、詩にめざめていく予兆も現れています。国文学者の谷鼎が同窓で親しかったようです。名簿が残っていないので正確にはわかりませんが、後に名を残した多くの人々（特に教育界）と一緒に生活していたことがわかります。その意味でも貴重です。

この貴重な資料の翻訳を早く完成させて、本にして愛好者の皆さんにお見せしたいと思っています。

★新聞記事（令和2年1月15日の読売新聞朝刊）の紹介



左の新聞記事に、重吉の2つの詩が引用されています。「冬」と「豚」です。

冬

木に眼が生って人を見てゐる

豚

この 豚だって

かあいいよ

こんな 春だもの

いいけしきをすって

むちゅうで あるいてきたんだもの

いずれも死後発行の重吉の第二詩集『貧しき信徒』の中の詩です。一度興味をもって読んだことがある人には、重吉の短い詩は、折に触れてふと思い出されてくる詩のようです。それも重吉の詩の特徴です。

★八木重吉と加藤武雄

八木重吉の又従兄弟である加藤武雄は当時の売れっ子作家であり、彼のおかげで重吉は詩集を発行できました。加藤武雄は重吉自ら編んだ2つの詩集の巻頭で八木重吉について語っていますので、改めて紹介します。

1 『秋の瞳』の巻首

八木重吉君は私の遠い親戚になってゐる。君の阿母さんは私の祖父の姪だ。私は祖父が、その一人の姪に就いて、或る愛情を以て語ってゐた事を思ひ出す。彼女は文事を解する。然う云って祖父はよろこんでゐた。

私は三十三の秋に上京した。上京前の一年間ばかり、私は郷里の小学校に教鞭をとってゐたが、君はその頃、私の教え子の一人だった。——君は、腹立ちぼい、気短かな、そのくせ、ひどくなまけ者の若い教師としての私を記憶してくれるかも知れないが、私は、そのころの君の事をあまりよく覚えてゐない。唯、非常におとなしいやや憂鬱な少年だったやうに思ふ。

小学校を卒業すると、君は、師範学校に入り、高等師範学校に入った。私が、その後、君に会ったのは、高等師範の学生時代だった。その時、私は、人生とは何ぞやといふ問題をひどくつきつめて考へてゐるやうな君を見た。彼もまた、この悩みを無くしては生きあはぬ人であったか？さう思つて私は嘆息した。が、その時は私はまだ、君の志向が文学にあらうとは思はなかつた。

君が、その任地なる撰津の御影から、一束の詩稿を送つて来たのは去年の春だった。君が詩をつくつたと聞かへ意外だった。しかも、その詩が、立派に一つの境地を持つてゐるのを見ると、私は驚き且つ喜ばずにはゐられなかつた。

私は、詩に就いては門外漢に過ぎない。君の詩の評価は、此の詩集によって、広く世に問ふ可きであつて、私がここで兎角の言葉を費す必要はないのであるが、君の詩が、いかに純真で清澄で、しかも、いかに深い人格的なものをその背景にもつてゐるか？これは私の、ひいき眼ばかりではなからうと思ふ。（大正十四年六月）

2 『貧しき信徒』の序

八木重吉君は私の再従兄弟である。曾て郷里の小学校で私の教え子であつた事もある。二、三年前詩集『秋の

瞳』を世に問ひ詩名を一部に知られてゐたが、昨年十月肺を病んで倒れた。行年三十。君の死の前、君から此の集の出版を囑せられ、しかも、いろいろの故障の故にそれを果し得なかつた私は、今此の集を梓にのぼすに当り、感慨の云ふべからざるものあるを覚ゆる。剣を墓木に掛けし古人の例もあり、私は今、此の書の成るを君が墓前に告げて、疎懶の罪を謝さうと思ふ。

君の詩が最近詩壇の一異彩たりしは識者の等しく知るところ、私は君が年少早く心を生死の大事に勞し、まことに求道者の姿ありし事を思ひ起す。此の集の価値は、此の集それ自身が語るであらう。(昭和三年一月)

加藤武雄→



★ 柏での八木重吉研究の草分けである館野晃氏亡くなる。

八木重吉が東葛飾高校(旧制中学)に勤務していた事を、同窓会の40周年記念誌に掲載し、千葉県の文学遺産として書籍や冊子に取り上げられるきっかけを作った館野晃氏が、2月中旬に亡くなったことを耳にしました。92歳だったそうです。伊藤晃のペンネームで作家、郷土史家として多くの著書を残し、また県議会議員としても活躍されました。そこで彼が東葛飾高校同窓会40周年記念誌に載せた文章を以下に紹介しておきます。

「この本校の草創期に、一人の若い詩人が教壇に立っていた。八木重吉氏である。八木氏は、英語科の担任で、記録の上では大正14年3月から昭和2年6月まで在職したことになる。新任式は、大正14年4月1日に行われている。しかし、退任式の記録がない。思うに在職途中で病を得て療養生活に入り教壇を去り、退職の正式発令が昭和2年6月であったのだろう。そしてこれは、同氏の死亡の日に近い。八木氏は、明治31年2月9日東京府南多摩郡堺村に生まれ、東京高師(現教育大)英文科の出身である。本校には、御影師範学校から来任した。敬虔なキリスト教徒で、職員生徒の間に信望を得ていた。詩人であることはすでに知られていたが、まだ当時は、後に氏が、有名詩人の列に加わるものであるとは、誰も想像しなかつたという。

鷺見正人氏(千葉市在住・医博・県議、二回生)の語るところによれば、大正15年度の1学期のある日のことであつたという。鷺見氏はその時2年A組というクラスに在籍していた。その組の英語の時間で、担当の八木氏が教室に入ってきた。その日の八木氏は、最初から、どこかふだんと違っていた。挨拶が済むなり、八木氏はいきなり詩の講義をはじめた。八木氏は一冊の詩の本を開け、静かなうちに熱をこめて語る。やがて、語り終え、その本を閉じた。そして一言、何かを暗示するように、「キリストの再来を信ず」と言った。半ば呆然たる面持ちの生徒の眼に見送られて、八木氏は間もなく教室から消えていった。これが、八木氏が東葛飾中学を去る日であつたという。もう、二度と再び、八木氏は生徒達の前に現れることはなかつた。退任式の記録も、残されていないわけである。同氏はそれから、茅ヶ崎で1年余の療養生活を送る。そして同地で、二十九才の若い生涯を終わるのである。後に、詩壇に占めた八木氏の位置を知った時、人々はみな、同氏の薫陶を受けた喜びと誇りを、あらためて感じたという。氏の処女詩集『秋の瞳』は、大正14年に出版されている。明らかにこれは本校在学中のことである。当時の生徒たちは、この詩集をむさぼるように読み、感化影響を受けたものが少なくなかつたという。今、八木氏の詩作品は、高校国語科の教材としても、時折出てくる。その静かな発想や淡い感傷、そして深い愛の精神などが、同氏の胸に柏の地で抱かれたということには、感なきを得ない。因みに、本校在任中の八木氏の宿舍は、正門前、流山街道を隔てて5、60メートルのところにあつたようである。また同氏夫人であつたとみ子さんは、その後再婚され、在鎌倉と聞く。戦後、『秋の瞳』『貧しき信徒』等の作品は、一本になり『八木重吉詩集』として、創元社から刊行され、後さらに創元社文庫に収められている。・・(以下詩の引用)

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

皆さんの、愛する重吉に対する思いを原稿にしてください。第5集に向けて作成を目指しています。どうぞ奮って原稿をお寄せ下さい。

(募集) 題:「八木重吉との出会いとその詩の魅力」(この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。)

字数:2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切:なし(随時お送りください)

送り先:メール(kmat27aiko@gmail.comへ)か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> (作成途中の部分があることをご了解下さい)

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com (管理者小林正継)